

★VOL 21 令和4年2月3日

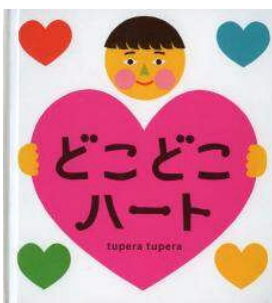


## 絵本の楽しさをあすそ分け

### ■「どこどこハート」

tuperatupera / 作

ハートのマーク探しをしながら、ハートの形に込められた〈大切さ・幸せ〉を感じる作品。●開いたページに描かれた動物やモノの一部にハートの形が使われ、文中〈どこどこハート?〉の問いかけに子どもが指を指して遊べます。1歳半ぐらいから親子で楽しめます。●〈ハート〉のくり返しが子どもの心に〈ハートって何だろう?〉を残します。●色づかいやデザインの良さも光ります。



### ■「こっちとこっち どっち?」

きたやまようこ / 作

自分の服や身につけるモノの色や形に好みが出てくる年頃にピッタリ。●うさびょんがお出かけする時に、服・ズボン・くつした・バッグ・帽子・クツを順に身につけますが、必ず色や形の違う2つが用意されます。●うさびょんが選んだモノと読んでもらう子どもが選ぶモノは同じでしょうか?●子どもの感覚や個性を知る手がかりにもなります。



す。●2才ぐらいから。

### ■「ちちんぷいぷい」

谷川俊太郎 / 文 堀内誠一 / 絵

半世紀という時を経て発見された堀内誠一さんの原画に谷川俊太郎さんが文を付けた新作。●右の表紙からお話が始まります。最初にリスがやってきて、キツネが台の上の帽子にハンカチをかぶせて取ると、帽子からドングリが出てきます。お次はウサギ、その次はサル…動物たちの好きな食べ物が順に現れます。●絵の楽しさをたっぷり味わうために文はほんの少しだけ。動物たちの表情が豊かで、キツネの手品の種明かしも愉快です。裏表紙まで楽しめます。●1歳半ぐらいから。



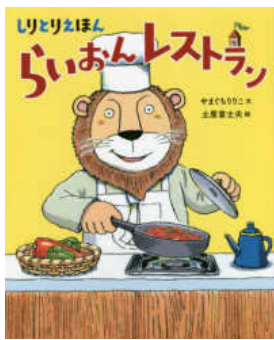
### ■「しりとりえほん

らいおんレストラン」

やまぐちりりこ / 文 土屋富士夫 / 絵

とことん〈しりとり遊び〉を楽しむ作品。●料理と食べることが好きなライオンがフライパンを背負って小さな〈シリトーリおうこく〉にやってきました。入口の看板には〈さいごに「ん」が付くものは入るべからず〉と書いてありますが、ラ

イオンはいい匂いに誘われ、読まずに入ってしまう。●町の中では王さまがもてなす誕生パーティがあり、ごちそうがいっぱい。王さまは、ごちそうを題材に〈しりとり〉をするのが大好きですが、ライオンはそんなことにお構いなくごちそうを食べ…。●作者がお話の中にしかけた〈しりとり〉がいくつもあり、それを楽しみながら、タイトルの〈らいおんレストラン〉に結びつく展開を楽しむという2倍おいしい作品。●4才くらいから。



### ■「麒麟のなやみごと」

ジョリ・ジョン／作 レイン・スミス／絵

子どもの麒麟は、首の長さがイヤ、イヤな理由は9つもあります。首が長いことで他の動物たちからジロジロ見られるのはもっとイヤ！だから他の動物たちの首の長さはステキに見え



てしかたありません。●そんな時、麒麟はカメの子どもと出会います。カメにはカメなりの首が短い困りごとがあり…2匹はお互いの首をほめあいながら、最後はハッピーエンドに。●首の長さを意識した大胆でセンスあふれるページ作りと2匹の会話が魅力になっています。そのままの自分がステキ！が子どもに伝わるかも…。4才くらいから。

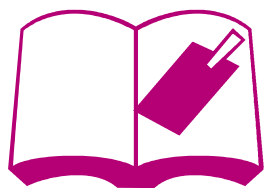
### ■「チリンでんしゃ」

大原悦子／文 村田エミコ／絵

大好きなおばあちゃんと動物園に行く子どものワクワク感があふれている作品。●ぼくたちが動物園行きの電車に乗って



トンネルに入ると、車掌さんは麒麟に、運転手はゾウ、そして乗客はいろいろな動物に変身！おまけに動物たちが車内で騒いだり遊んだり…柔らかな線の木版画で表情豊かな動物たちを描き（表紙の見返しに楽しい仕掛けがあります）、それが子どものウキウキした気持ちを表しています。●3歳半くらいから。



## 本との出会いを

## ボーイズ&ガールズに

### ■「はやとちりからはじまった」

藤田千津／作 夏目尚吾／絵

時代を超えて子どもも時代の思い出がつながり、心地よさを感じる物語。●1年生のマコトが学校の帰りに同級生のコウくん呼び止められ、森のそばの畑でたき火をして焼きイモを食べないかと誘われます。コ



ウくんのお父さんが、畑のおじさんにサツマイモを焼いてごちそうになったとのこと。そこへチヨちゃん加わり、コウくんの話の出どころが不自然なので、3人とも家族に聞いてもう一度集まることに…3人のおばあちゃん、お父さん、お母さん、お兄ちゃんたちが記憶している〈森の畑〉には色々なエピソードがありましたが、焼きイモは昔のことで、今はしていないことが判明。●でも、このコウくんの早とちりから昔と今が〈あるおじさん〉を通してつながり、心やさしく、心あたたまるお話にな

っていきます。何気ない日常の中に子どもたちは喜びや楽しさを見つけていることに気づかされます。●小学校低学年に。

## ■「コトノ八町は きょうもヘンテコ」

屋田弥子／作 早川世詩男／絵

ことわざや慣用句を言葉通りに解釈するとどうなる？を6つの短編集にまとめた物語。●主人公は女の子レンちゃん。●1話目は「レンちゃん、道草をくう」。



〈道草〉は、〈寄り道〉のことですが、文字通り〈草を食べてしまう〉お話。レンちゃんがおじいちゃんの家へあんころ餅を持っていく途中の土手には道の草を食べている人たちがいて、牛になってしまう人も…レンちゃんがついつい草を食べ続けているとお尻に根が生え、地面から抜けなくなり、あんころ餅はじっとしていたので羽が生えて飛んでいきます。●とってもへんてこながらほほえましいお話がたっぷり。●6話目は、それまでのお話から少しずつエピソードを寄せ集めてその後の展開を綴ったおまけ。もう一つ、それぞれのお話で使われたことわざなどの意味と使い方が載っているので、楽しみながら知識を得ることができます。●小学校中学年に。

## ■「どっちでもいい子」

かさいまり／作 おとないちあき／絵

クラスのカで〈いてもいなくても、どっちでもいい子〉と言われている女の子が、ヒップホップに出会ってから少しずつ自分を主張できるようになる成長物語。●4年生になったはるは、自分の意見をちゃんと言えません。考えれば考えるほど決められなくなるのです。だから決めごとの話し合いでは、つい〈どっちでもいい、みんなの言うとおりに〉に。●はるは偶然、

ヒップホップ教室の見学をして心が動かされ、ダンスが頭から離れなくなります。自分から一歩進む…はるがちょっとずつ変わっていく瞬間ですが、はるのことを偏見なく接しているクラスメイトの颯太



（そうた）と玲奈（れいな）が大きな役割を果たしています。●物語の最後に言うはるのひとりごとがステキです。●小学校中高学年に。

## ■「もうひとつの アンデルセン童話」

斉藤洋／作 広瀬弦／絵

原作を知っていれば、こんな風にも話を変えることができるんだと驚き、知らなければ単純におもしろい物語として読めます。●作品は、「みにくいアヒルの子」「人魚姫」「はだかの王様」の3作。



●作者が取材のため訪れた〈ふなばしアンデルセン公園〉で出会った1羽のハクチョウが語り出す〈空を飛んだアヒルの子〉から始まります。3話の語り手が作者に語る話は、3作ともこれが真実！だとばかりに、原作とはまったく違うストーリー。原作の名前だけ借り、とびっきりの読んでおもしろい物語集にしています。●頑張りや誠実さ、痛快さ、友情など物語をおもしろくする調味料もふんだんに使われています。●小学校中高学年から。

## ■「屋根に上る」

かみやとしこ／作 かわいちひろ／絵

小さな子どもではないけれど、おとなでもない中学生にとって、どんな人と出会うか、そして、その出会いを自分な

りにどう活かしていくのかを問いかける作品。

●有名私立中学にどう  
いうわけか受かった皓  
(こう)は、自宅の屋根  
根に上るのが好き。屋根  
根の上で横たわると心に  
閉じ込めていたものが  
ゆるゆる溶け出し、



体が軽くなるのです。●ある日、帰宅すると長身でがっしりとした村田というおじいさんが屋根登りに使っているはしごを見て、痛んでいるところを直してみたいと皓に話しかけてきます。村田さんは大工頭だった皓の祖父に大変世話になった元大工さんで、はしごは皓の祖父が作ったもの。●物語は、村田さんがはしごを直しながら、祖父が作ったはしごの材料や木組みの技のすごさを語り、ていねいな仕事を皓に見せながら、皓が抱える今の状況をやさしく見守り、心にしみる言葉をかけます。●この物語には、皓と小学校時代の同級生一樹(いつき)が重要な役割を果たします。一樹は村田さんの大工としての腕前に見惚れ、弟子入り同然…村田さんの家で一樹と出会った皓は、村田さんの誠実な生き方と言葉、一樹のひたむきな気持ちに影響を受けながら一樹とともに自らの未来を切り開くのは自分だという答えにたどり着きます。●中学生時代は、家族や友だち、励ましてくれるおとななど人と出会って語り合うことで成長する…そう気づかせてくれる物語。

## ■「学園ミステリー」

恩田陸・米沢穂信・青崎有吾／作

サブタイトルが「絶対名作 十代のためのベスト・ショート・ミステリー」。3人の作品に共通するのは、オリジナルの作品があり、その特別編のような物語だということ。●恩田陸「水晶の夜、翡翠の朝」は、サトウハチローの詩「わらいカワセミにはなすなよ」と連動する連続事件が軸。主人公が解き明かす謎とタイトルの鮮やかさ、主人公の置かれた立場などが

短い物語の中にいくつもの仕掛けが施され、最後の数ページにそれらが吸い込まれ、気持ち良さが残ります。●米沢穂信「鏡には映らない」は、中学校の全校生徒で作った卒業制作



の大きな鏡に仕組まれた巧妙な悪意が題材。その制作の過程で1人の男子がみんなから作品を台無しにしたとして嫌われますが、そのことに引っかかりを持った女生徒が真実を掘り返します。手の込んだ終わり方がお見事。●青崎有吾「メロンソーダ・ファクトリー」は、カラーユニバーサルを題材にした物語。物語のあちこちに隠されたヒントが最後にピタッと収まります。登場する少女たちの会話の一つひとつが計算されていて、読んだ後でそれを振り返って二度味わえます。●中高生に。

## ■「そらのことばが降ってくる」

高柳克弘／作

サブタイトルは「保健室の俳句会」。クラスや部活動、家族からあからさまないじめや悪意の手紙、進むべき道への無理解など、〈言葉の暴力〉で傷ついた3人の中学生が保健室での俳句会／ヒマワリ句会を通して句友、そしてかけがえのない友だちとして結びつく物語。●作者は俳人で、短い言葉に意味を込めて言葉を選ぶ達人。作者は最後にタイトルにつながる句を用意し、主人公のそらが歩み出す気持ちを「言葉は、とても頼りない。形がなくて、すぐに消えてしまう…でも、その言葉を受け止めて、一步踏み出すことができたのも、ゆるぎない事実」と語らせます。●言葉を研ぎ澄ます俳句を通して、〈言葉〉は、自分と周りの人たちにより良い心の化学反応を起こすんだ、というメッセージが伝わってきます。

